幼児における歯列および

口呼吸調査 第2報

こいし歯科
＊下平尾　知波
笹岡　志帆
小石剛

池田市 こいし歯科 https://www.834814.com/ >>

目的

近年, 歯列不正を主訴とする幼児来院者が多く, さらに幼児患者における口呼吸, またはその疑いがある患者も多いと感じている.
そこで幼児における歯列および口呼吸の状況を調べることにした.

対象

兵庫県宝塚市の某幼稚園児678名
（平成24～26年度3歳児から6歳児）

〈参考：ホームページより〉

- 兵庫県宝塚市　私立幼稚園
- 周辺：住宅街
- 園児人数：２００人

- 給食制度
  週2日給食
  　米飯給食１日
  　パン給食１日
  週２日弁当
  　※残り１日は午前中のみ

方法

兵庫県宝塚市の某幼稚園児名678名（3歳から6歳）を対象とし,
平成24年から26年の1年ごとに,歯科検診時に歯列の状態および口呼吸の有無について調べた.
歯列状態・口呼吸の基準は,以下のように分類し,
口呼吸と学年の相関の統計解析には,ピアソンの相関係数を使用した.

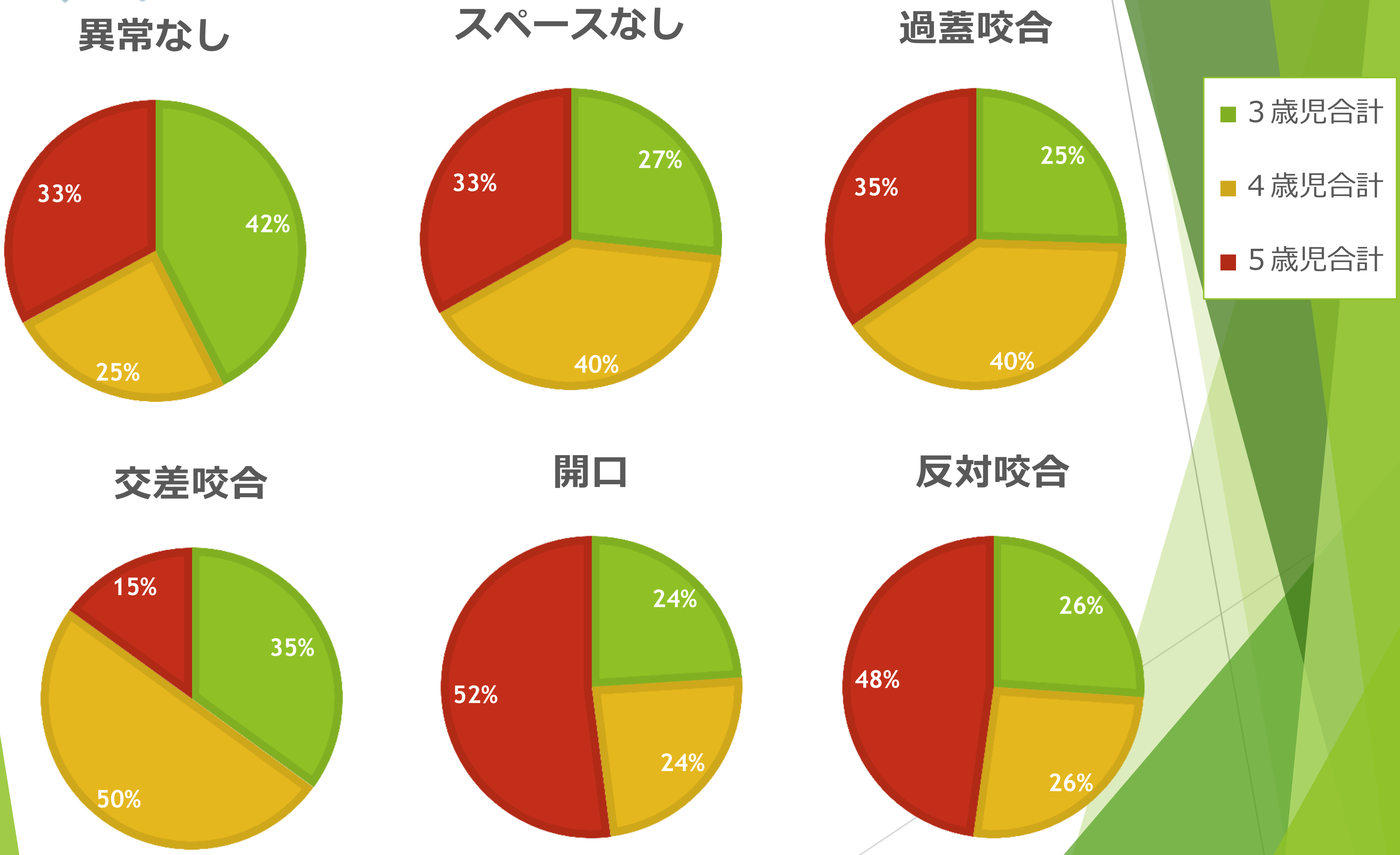
〈歯列分類〉

異常なし	：その他の異常が見られない者
スペース無し	：霊長空隙および成長空隙が認められない者
過蓋咬合	：上顎前歯が下顎前歯を3分の2以上被蓋する者
交差咬合	：歯列の一部のかみ合わせが交差している者
開口	：臼歯での咬合の際に前歯がかみ合わない者
反対咬合	：上下顎の位置が逆になっている者

〈口呼吸分類〉

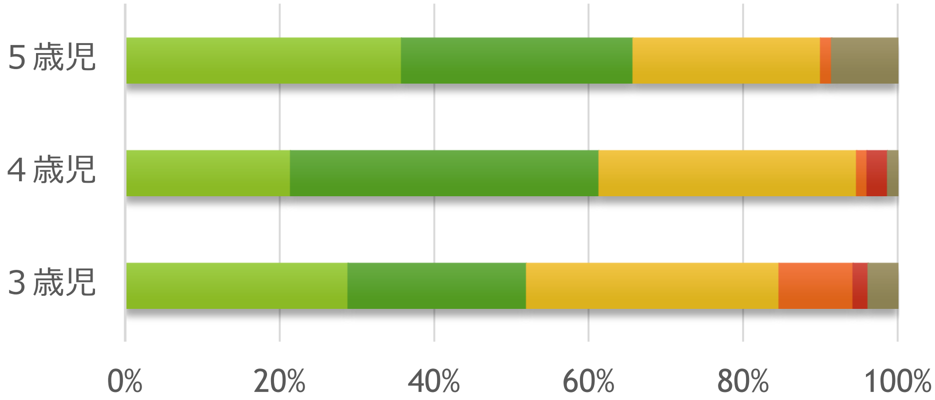
口呼吸	：安静時の口唇閉鎖の不全が認められる者
疑いあり	：上顎前歯のみの色素沈着.口唇の乾燥がある者

結果1-① 年齢と不正咬合

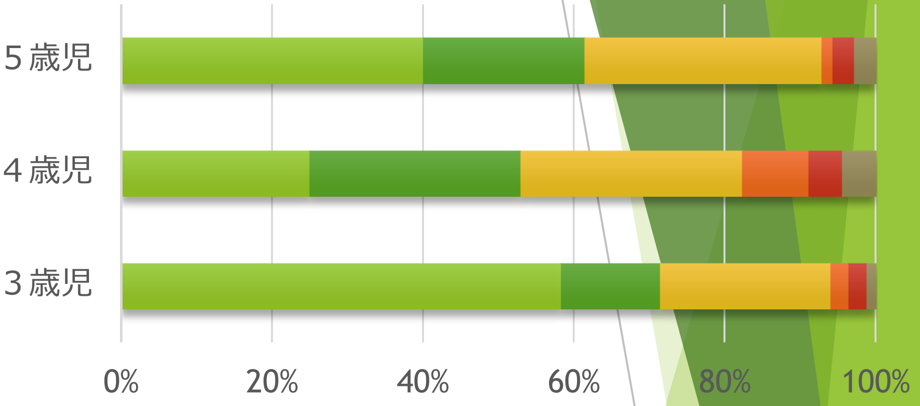


結果1-② 年度別不正咬合の割合

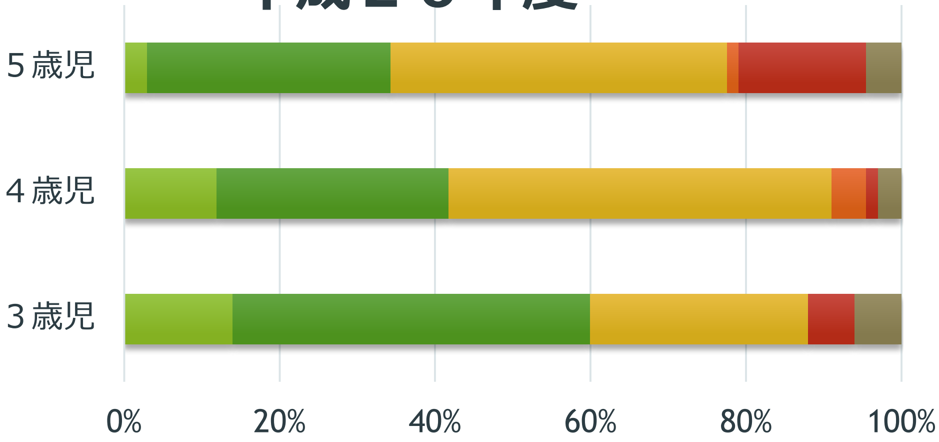
平成２４年度

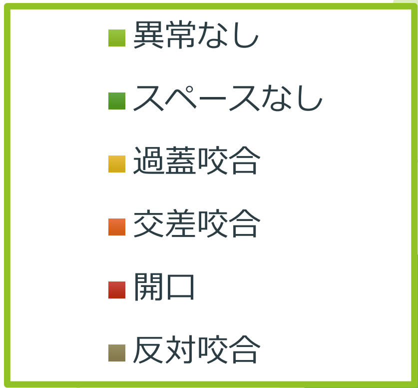


平成２５年度

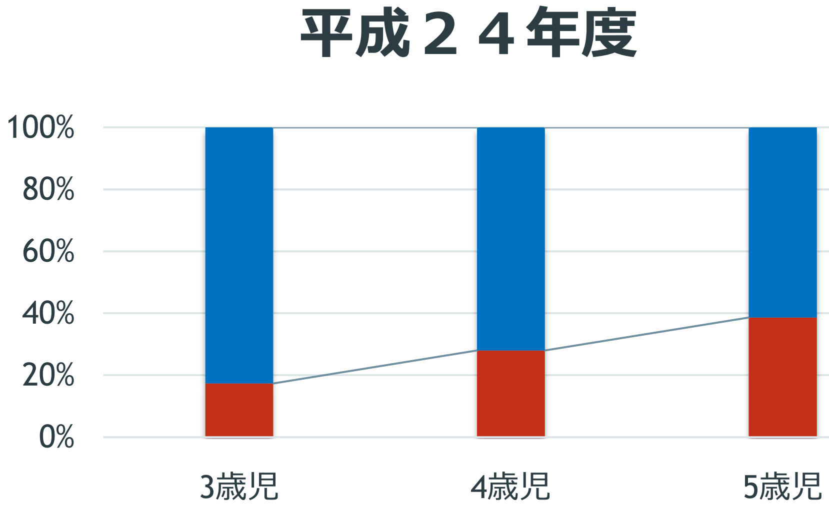


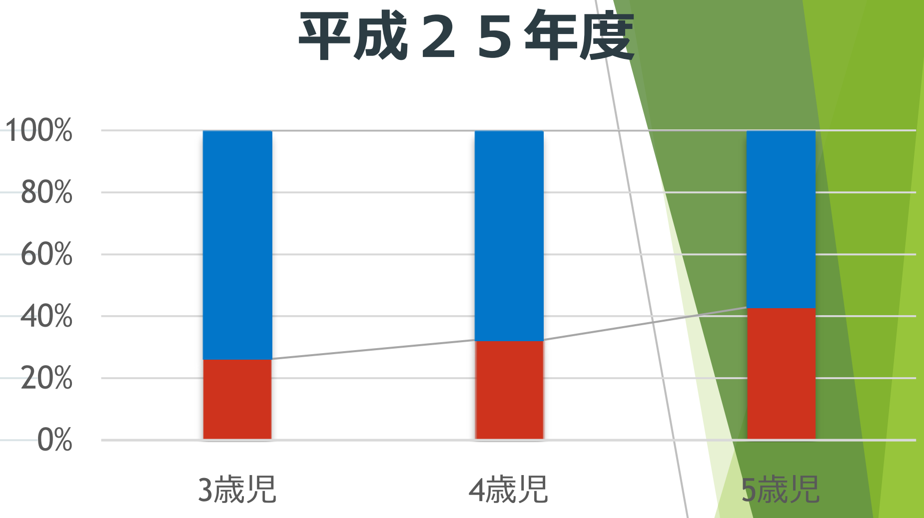
平成２６年度

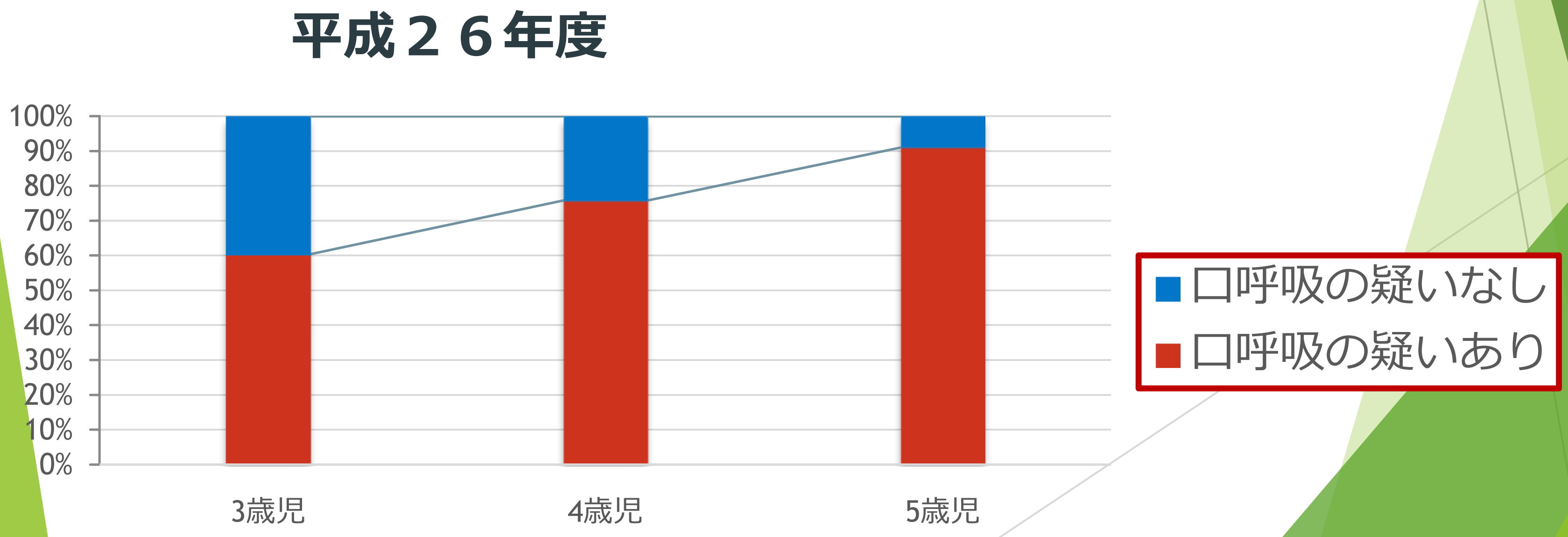




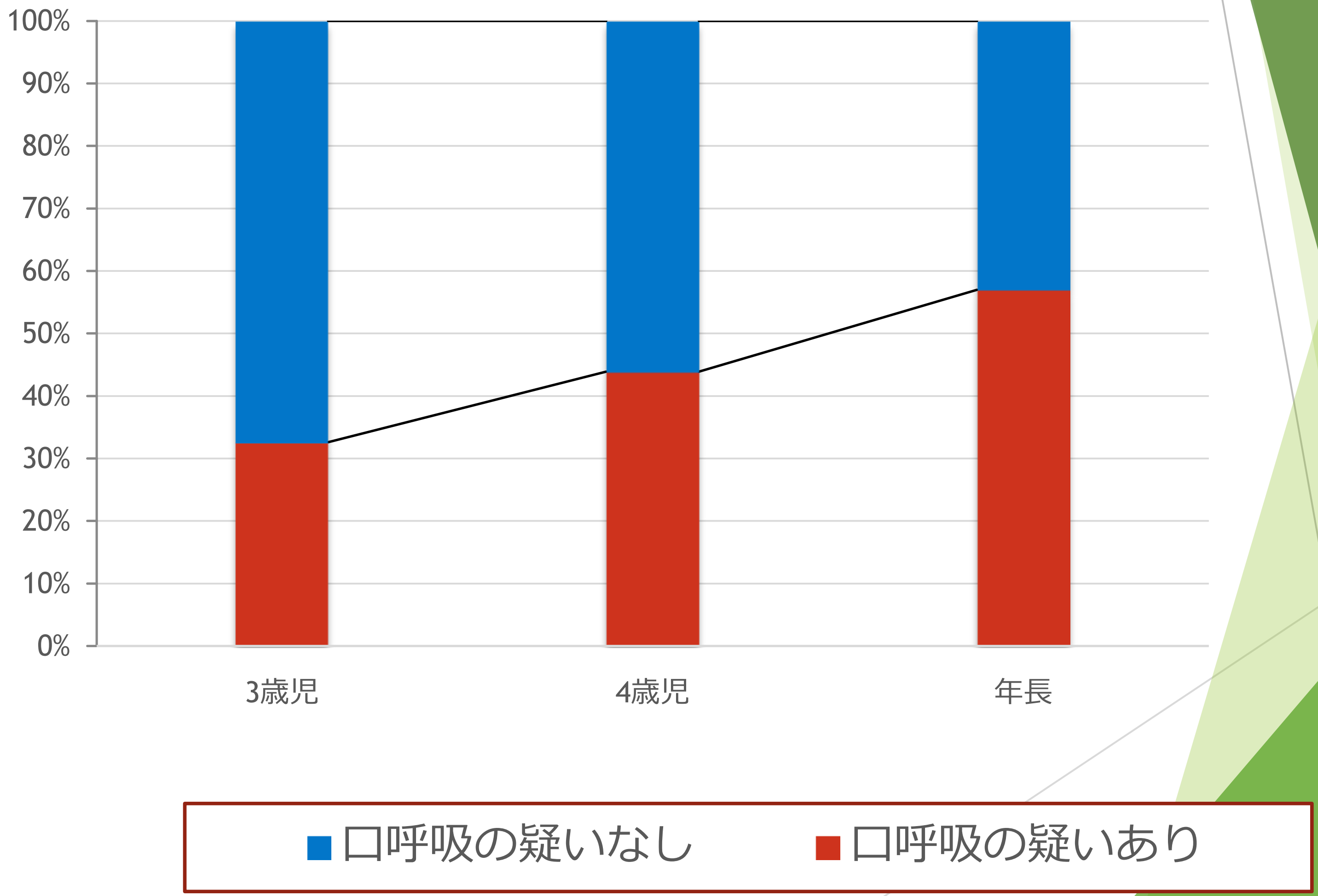
結果2　年度別・年齢別にみた口呼吸







結果3　口呼吸の割合



考察

- スペースなし・過蓋咬合・交叉咬合では3歳児から4歳児にかけて割合が増加しており,4歳児から5歳児にかけて減少している.　このことは4歳から5歳にかけての脳頭蓋および上顎の成長による改善と考えられる.

- 開口および反対咬合は3歳よりも５歳での割合が大きい.これは,開口および反対咬合が舌癖による影響であるならば,その影響が継時的に表れた結果と考えられる.

- 平成26年度の不正咬合の割合が増えたことは,単に不正咬合者が増えただけとも考えられるが,調査基準があいまいであった可能性も否定できない.そのため,今後の研究において基準の改正や明確化が必要であると考える.

まとめ

不正咬合は顎顔面の発育による改善も予想されるが,その割合は非常に大きく,発育期の子どもたちへの身体への影響も懸念される.

開口や反対咬合は早期に舌癖などに対し,支援や介入行い悪化を防ぐ必要性があると感じた.

今後も調査基準を見直したうえで調査を継続し,臨床や地域保健に生かしたい.

池田市 こいし歯科 https://www.834814.com/ >>